

# 禪が伝えたお茶の話



画：正親里紗

## 第4回 端午の節句とお茶の話

館 隆 志

今回は、端午<sup>たんご</sup>の節句とお茶の話を致します。端午の節句は五月五日の節句です。本来は五月号にこの話を書きたいのはやまやまだったのですが、連載が始まって第二回目に端午の節句とは、いくらなんでも空気が読めていないようで、どうにも気が引けました。しかし、七月号に端午の節句というのも季節感が解っていないと皆さまに怒られてしまいそうです。この『花園』七月号は、六月二十五日に発行されることになっています。日本において、二〇二〇年の端午の節句は二〇二〇年五月五日なのは言うまでもありません。しかし、日本以外の、中国、台湾、韓国などでは、二〇二〇年の端午の節句は、六月二十五日です。本誌『花園』七月号が刊行された今日こそが、二〇二〇年の旧暦における端午の節句ということになります。

端午はもとは「端五」と書き、月初めの五日を意味する言葉でしたが、次第に、五月五日を表す言葉になりました。古代の中国で五月は悪月とされていました。そのため、蘭を

用いた「浴蘭」や、艾を人の形に作り門戸の上に懸ける習俗、菖蒲を酒に浮かべる菖蒲酒など、邪気を祓うための風習が端午に取り入れられたようです。唐代には、古代中国の楚国の政治家で詩人の屈原が汨羅（湖南省の川）で身を投じた日とし、粽を水中にながして祭り厄を祓う日と解されたのです。

蘭、菖蒲、艾を用いる種々の行事は、さまざまに形を変えて地方に伝播し、国を越えて伝わり、現在に伝承されているものもありますが、これらはもともと邪気を祓うための習俗であったようです。ちなみに、菖蒲を浮かべるお風呂「菖蒲湯」は、「浴蘭」と菖蒲を用いた風習が合わさってできた日本独自の端午の習俗です。

禅では日常生活を重んじたため、当時の中国で日常的に行われていた喫茶文化が禅林に導入されたお話を以前致しました。そして、当時の中国で行われていた他の一般の風習も、禅林に取り入れられたのです。その一つが端午の節句です。

端午の節句で行われていた主要行事の一つが菖蒲酒です。しかし禅寺では、お酒を飲むわけにはまいりません。そこで、宋代の禅林で新たに登場したのが菖蒲茶です。酒の代わりにお茶を使い、お茶に菖蒲の葉を浮かべて飲むことが、宋代の禅林で行われていました。そして、それは禅林の中だけで行われたよう、他の仏教宗派では行われた形跡がみられないのです。すなわち、禅林独自の喫茶文化ということができるとでしょう。

この菖蒲茶をいろいろな禅籍から記述を集めて復元してみますと、お茶はおそらく抹茶を用いたと考えられ、色は緑とあります。「酾茶（濃い茶）」と記している史料もあるのですが、かなり濃く苦くいれていたようです。そこに、細く切った菖蒲の葉を浮かべます。

ここで用いる菖蒲は、菖蒲（しょうぶ）、あるいは石菖蒲（せきしょうぶ）で、花菖蒲（あやめ）ではありません。そして、菖蒲を浮かべた茶を飲むのですが、この際に菖蒲の葉を口の中で嚼むようです。苦いお茶を飲んで、

さらに菖蒲を嚼み砕いてさらなる苦さを味わうので、声を失い思わず「アー」と言ってしまったなんて記録もあるくらいです。

この菖蒲茶も日本に輸入されており、多くの日本の禅僧の記録に菖蒲茶の記録が見られます。そして、口の中で菖蒲を嚼み砕いて苦さを味わう中国の飲み方は、日本にも伝わっていました。

その後、端午の習俗は、南北朝期には菖蒲甲かぶとが作られるなど、武家社会との接点が見られるようになり、江戸時代には、武家と端午の行事が結びつくことになりました。これは、武を尊ぶという「尚武しょうぶ」を、端午の「菖蒲」に掛けたものと考えられています。さらに、辟邪へきじや（厄祓い）としての端午の風習は、徐々に「祝」としての性格を帯びるようになっていったとみられ、少なくとも江戸時代には端午は「祝」の行事になったようです。

もともとは、中世禅林の菖蒲茶は中国の辟邪思想であり、あえて苦く飲み、そこで生じる菖蒲の香りで邪気を祓っていました。しか

し、江戸時代の禅林では、「祝茶」として菖蒲茶を飲むという考え方に変化していったのです。行事としては南宋禅林を受け継ぎつつ、日本化した意味を付加させていったのです。

中国では、明朝の末期から清朝の初めにはすでに途絶えていたとみられる菖蒲茶という宋朝禅林文化は、日本ではその後も受け継がれ、少なくとも明治初頭までは確認することができまます。南宋時代に入ってきた禅林文化を大切にしていたことが窺えるのです。しかし、残念ながら現在は菖蒲茶の文化は完全に失われてしまっています。

機会があれば、決して美味しくはありませんが、端午の節句に菖蒲茶を作って、南宋禅林、そして鎌倉時代の禅林に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。駒澤大学専任講師・花園大学国際禅学研究所客員研究員。著書に「園城寺公胤の研究」（春秋社）、「蘭溪道隆禅師全集」第一巻（共編、思文閣出版）。

# お願い

## 花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

\*ㄨ切りは毎月1日です。

## 『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。お待ちしております。

送り先

〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町64  
妙心寺派宗務本所内編集室  
俳壇／歌壇／花園 係

\*住所、氏名を必ずお書きください。

\*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

\*なお投稿はお返しいたしません。



「いつもココロに花園を」  
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花園】第70巻 第7号(通巻第827号)  
令和2年7月1日発行(毎月1日発行)  
定価55円

【発行人】栗原正雄

【編集人】石田信行

【印刷人】喜田眞司

【発行所】京都市右京区花園妙心寺町64  
妙心寺派宗務本所 教化センター  
振替 / 01060-9-1400  
電話 / 075-463-3121

表紙の絵 「心願成就」



心の内なる願いを神仏に感謝し祈り、  
思いを成就させていこう。

絵・花咲幸絵

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,560円(税・送料込)です。  
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】

<http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002>

\*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。